

るを祝する。この頃から所々に除蝗祭を行ふものがある。

アヲムシロ あま庭 一冊。梅室が寒松庵に移つた時、『陰あらし松を時雨のやどり哉』の句があつたのに、弟子達が歌仙の附合を興行したのを巻頭に置き、諸國俳人の句を集めてある。序跋等はないが、天保三辰年間十一月の集である。梅室は此の年十一月江戸上槇町の寓に轉じたのだから、寒松庵といふのはそこであらう。

アヲモノイチバ 青物市場 金澤の青物市場は青草辻に在つた。初め上今町に在つたのであるが、袋町の魚市場が近江町に移つた時、青物市場もそれに隣接する青草辻に轉じたので、それは元禄三年の火災以後のことかと思はれる。犀川口でも魚屋町の附近堅町に青物市場があつたが、魚屋町が近江町に合併した頃、青物市場も青草辻と一つになつたのであらうといはれる。

アヲヤギヤマ 青柳山 能美郡白峰部落の東北に在る。高さ一〇三三米。山體侏羅系。

アヲヤマカンスイ 青山觀水 名は忠次。金澤の人。吉田公均に學んで南宗の畫を善く描いた。明治廿七年七月から卅三年七月まで石川縣立工業學校助教諭を勤め、同年七月廿四日歿した。

アヲヤマキンエモン 青山金右衛門 前田利家に仕へて二百石を領し、慶長五年利長の太聖寺攻撃の際討死した。子孫相繼いで藩に仕へた。

アヲヤマトシツグ 青山俊次 通稱伊豆。豊後長正の次子。初め父の遺知の内二千石を受けたが、兄豊後正次の死後、その嫡子將監

吉隆幼なるを以て三千石を興へられ、俊次に又二千石を分かつて後見を託した。然るに吉隆の十四歳に及び、俊次が本家の武器重器を引渡す際、吉隆の家老早崎庄左衛門と争うて之を手討にしたので流刑に處せられ、寛永十九年八月十七日能登富木で歿し、家斷絶した。

アヲヤマトモチカ 青山知親 通稱九郎兵衛、老後一阿と稱した。前田土佐守の家臣で、寛政三年土佐守の届書に和歌指南者とある。奥村尙寛はその門下であつた。享和二年正月歿、年七十餘。

アヲヤマトモツグ 青山知次 通稱與三。將監。寛政九年祖父將監勇次致仕の後七千五百石を領し、次いでその隠居料五百石を併せ、定火消・御佛殿火消・奏者番・寺社奉行兼公事場奉行を經、文政六年御家老、九年兼御近習御用に任じ、弘化元年致仕して洪水軒と稱し、俸七百石を受けた。安政二年四月四日歿。知次文事を好み、書畫を能くし、碧鱗草・清陰亭又は洪水と號した。文化以後心を海外の事情に注ぎ、學者を保護し、器械を購ひ、天保末年には齋藤三九郎を聘し、弘化三年三九郎をして大砲三門を作らしめた。關隘黒川良安の藩に仕へたも、亦知次の推薦によつたのである。

アヲヤマナガマサ 青山長正 初諱長次。通稱與三。豊後。實は淺野左近の子。その母が末森城主土肥但馬に再醮するに及び、但馬の養ふ所となつたが、後前田利家の命により青山吉次の義子となり、その祿一萬七千石（諸士系譜一萬四千七百五十石に作るもの恐らくは非）を襲ぎ、魚津城の守將となつた。次いで關東征伐に功を立て、利長の太聖寺攻撃に

從ひ、利常の時大坂の役には魚津城に留守したが、元和元年五月二十日齡四十三を以て歿した。後祿を分かち、一萬三千五百石を長子正次に、二千石を次子俊次に賜はり、その餘を除かれた。

アヲヤママサツグ 青山正次 通稱豊後。豊後長正の長子。元和五年祿一萬三千五百石を襲ぎ、魚津城代に任じ、後金澤に歸つて元和七年八月十日歿した。年廿二。

アヲヤマムネナガ 青山宗長 通稱左近。織部。佐渡吉次の孫で、豊後長正の季子である。前田利常に仕へて五百石を受け、元和の初幕府に質として江戸に在つたが、綱紀襲封の時、祿を増して二千六百五十石となり、萬治三年人持組に陞り、延寶三年歿。年六十四。宗長俊才を以て時人の推稱する所となり、將軍家光に對する松平信綱に比せられた。

アヲヤマヨシカツ 青山芳雄 通稱四郎左衛門。父數馬の遺知二百石を襲ぎ、組外に班し、聞番見習・物頭並聞番に任じ、文政中百石を加へ、遂に組頭並に至り、天保九年免ぜられた。

アヲヤマヨシタカ 青山吉隆 通稱鶴千代。與三・豊後・將監。父は正次。吉隆四歳にして家を繼ぎ、祿三千石を受け、十四歳にして三千石を加へ、前後増祿九千六百石に至つた。性勇壯を以て神尾直次・前田恒知・寺西秀賢と共に四天王と稱へられ、寛永十六年利常に小松城に從ひ、正保の初前田綱紀の傳となり、萬治二年齡四十を以て歿。

アヲヤマヨシタカ 青山芳隆 通稱四郎右衛門。寶曆中召出されて二十人扶持を受け、組外並に班し、江戸に在住して有職の事を掌

つた。明和六年五十八歳を以て歿。子孫相繼いで藩に仕へた。

アヲヤマヨシツグ 青山吉次 通稱佐渡。小字は與三。尾張の人。姓は橋。父は與左衛門吉永。吉次年十五にして織田信長に仕へ、鷹匠として七十石を受けたが、後使番となり、四百五十石を加へ、永祿・元龜年間慶功を立てた。信長の薨後、前田利家の姪賢たるを以て來り仕へ、千石を賜はり、柳ヶ瀬の役に從ひ、次いで利長に仕へ、二千石を増し、末森の役にも亦功を立てた。翌年蓮沼の役後更に二千石を加へ、名刀一口を賜はつた。次いで加賀鳥越・豊前巖石・上野松枝・武藏八王子の諸役に從ひ、婦貞郡城生・新川郡魚津の守將となり、前後祿を合はせて一萬七千石を食み、慶長三年四月從五位下佐渡守に叙任し、十七年六月晦日魚津城に歿した。享年七十一。

アンカンジ 安閑寺 金澤五十人町に在つて、眞宗東派に屬する。寺記に初め北石坂町に在つたが、明治十七年今の地に移つたとある。

アンコクジ 安國寺 (一)安國寺造立—安國寺は利生塔と共に、足利氏によつて國別に創建されたものである。初め尊氏・直義深く僧磧石に歸依したが、磧石は元弘以來尊氏等が干戈を事として、その罪業甚深なるを説いた。依つて延元三年(曆應元)五月直義は利泉の久米寺に塔婆を起さしめ、その料所を寄進し、翌年六月一日また毎國に寺塔を建て、勅願とせんことを請うて許された。尋いで興國五年(康永三)七月廿一日幕府はその通號を定めて、寺を安國、塔を利生と稱することを稟請した。